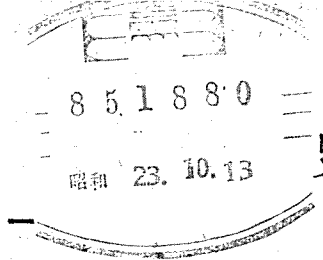


史



林

第三十一卷 第一號

談

清

清

議

(通卷第二十號)昭和二十一年一月發行

宮崎市定

支那では歴代の土風と官吏登用法との間には密接な關係がある。官吏登用法のことを選舉と稱するが、これは郷黨の輿論による推薦といふ位の意味であり、天子はこの輿論に従つて在野の賢人を抜擢して官吏に用ひるのが政治の要訣とされてゐる。前漢の武帝が儒教を以て官學と定めてから、人材に對する評價の標準も自然に儒教主義に歸一されたが、但し儒教には二つの方面がある。一は學問としての儒教であつて、よく經書の義理に通じ、之を政治に應用し得る才能であり、一は修身としての儒

教であつて、自ら儒教の禮制を履み、以て他の儀表となるに足る德行である。勿論學才と德行とを二分するのは儒教本來の趣旨ではないが、選舉の方針として實際に當つた時には、自然にこの二面が表はれて來るのである。前漢の宣帝の頃の博士であつた夏侯勝が「士は經術に明かならざるを病む。經術苟くも明かならば、その青紫を取ること、地に俯して芥を拾ふが如きのみ」と云つたのは前者の場合であり、後漢に入つて孝廉が重用されたのは後者の場合である。然し乍らこの儒教的選舉の理想とする下情輿論の土達は容易に圓滑に實現されなかつた。

(1)

それは主として權勢者の恣意によつて抑蔽されたが爲である。殊に後漢の中期以後、宮中が外戚宦官の占據する所となり、外戚宦官はその親戚私黨を擧げて要處に布置し、私利私欲を營んで公正なるべき選舉を混濁したのであつた。獻帝の時の宦官張讓等は父子兄弟、並に州郡に據り、京畿諸郡の數百萬膏腴の美田はその手に屬するに至ると稱せられた。斯る状態に反抗して起つたのが民間の清議である。小人朝を専らにして君子野に在りと云はれた、所謂民間の志士は、朝廷の官吏登用の標準を以て據るに足らずとなし、自らの鑒識に基づいて名士番付を作成し、輿論に従つて各人の等級評語を上下したものである。かの河南の月旦の評の如きはその一例である。偶まする民間勢力を背景として朝廷に地歩を占めたる高官があれば、彼は勢ひ甚深の敬意を拂つて民間の清議に對せねばならなかつた。陳蕃が豫章太守として赴任するや公府に入るに先立つて隠士徐穉の居を訪問したるが如きはその一例である。

漢末黃巾の賊の蜂起は天下を大混亂に陥れ、王室も宦

官も、玉石共に焚かれ漸くにして曹操なる個人の手によつて社會の秩序が恢復されたが、その時は劉氏の漢室は最早天下の主權者ではなかつた。曹操は漢の丞相として朝廷の實權を掌握し自由に官吏を進退してゐたが、纏て魏王に封ぜられ、此に事實上の魏王朝が成立し、從つて選舉の權も公に曹操の手に移つたのである。曹操が丞相となつたのは漢獻帝の建安十三年であるが、この時選舉の任に當つた者は引續き崔琰と毛玠の二人であつた。

二人の選舉の方針は一度失はれたる清議の復活であり、崔琰、清議を摠齊すること十有餘年、文武の群才、明拔する所多しと稱せられ、毛玠は、擧用する所みな清正の士にして、時に盛名ありと雖も行の本に由らざる者は終に進むことを得ず、努めて儉を以て人を率ゐたので、天下の士は廉節を以て自ら勵まざるはなしと稱せられた。

この點に於いて崔琰毛玠のやり方は、曹操の才能本位の人材拔擢方針との間に若干の喰ひ違ひを生じたい。又兩人の選舉の標準があまりに嚴格に過ぎたため、官吏は故意に垢面羸衣、柴車に獨乘し、或は朝服を衣て徒行

するといふ矯偽の風も生じたので、曹操は遂に建安二十一年、兩人の職を免じ、清議の行き過ぎを是正せねばならなかつた。その翌年には特に令を下して、異常の人才にして従來汚辱の名を負ひ、笑はるゝの行あり、或は不仁不孝と稱せられても、治國用兵の術ある者は拔擢して遣す所ある勿れと命じてゐる。

曹操は建安二十五年正月に歿し、子曹丕が魏王の爵を嗣ぐと、十月には漢獻帝に迫つて帝位を禪らしめ、此に名實相伴ふ魏朝の出現を見るが、この易姓革命の直前、選舉史上に於ける劃期的な大變革は、陳群の獻議による九品中正制度の創立である。之は民間の清議を採擇して官吏を登用する機關として、特に州郡に中正なる官を設け、其地方の名士を以て之に任命し、中正は訪問なる部下を用ひて民間の輿論を探り、之を中央に上申するといふ組織である。中正はその地方の人物に就いて、上上より下下に至る九等の階級(品)と、之に相應する簡單なる評語狀を附した一覽表を作成し、更に其後の本人の行狀を參酌して絶へず補訂増減しなければならぬ。而して朝廷

に於いて人材を要求する毎に中正は、適當なる人物を選んで推薦するのであるが、之には前記の如き品と狀とを副へて提出する。狀はまた題目、目、名狀などと呼ばれ例へば天才英特・亮拔不群の如き字句で表はすが、三國六朝時代人の傳記に散見するこの種の總括的形容辭は斯る中正の下したる名狀を材料にしたと思はれる。中正が品狀すべき人物には自ら一定の範圍があり、大體に於いて士の階級に限られてゐる。之は官吏の子弟若くは特定の師に就いて學を受くる生徒を指し、此等は特別の戶籍に載せられて吏籍、又は士籍と稱せられてゐた。但し士籍は時に兵籍を意味することがあるから、貴族階級を指す士のそれとは嚴格に區別されなければならない。但し帝室の一族たる宗室は中正の取扱ふ範圍外に置かれたものと思はれる。宗室を除く天下の士は、如何なる朝廷の權勢者の子弟も、先づ中正の下す品狀によつて推舉を受けなければならぬ。魏が衰へて實權が司馬氏の手に移つた際も、司馬氏嫡統の御曹司たる司馬炎、即ち後の晋武帝は矢張その州の中正から品狀を與へられてゐる。され

ば中正の品狀すべき人物の數は莫大の數に上り、一國一郡に於いて既に千名に上ることも稀でない。その結果、中正の内申書も常に適切なるを期し難く、優柔なる中正は努めて權勢者に阿附してその子弟に優秀なる品狀を與へ、嚴正を標榜する者は毛を吹き疵を求め、小過によつて全體を抹殺する傾向があり、之と同時に士人の間にも黨同異伐して流言を放ち、他人を中傷して自らに虚譽を求める風が起つた。此に於いてか、ひたむきに名節を勤む美俗が廢れ、外部に向つて顔を賣り交際を求める弊害が生じたのであるが、當時の人は之を輕薄浮華と形容して識者の擧蹙する所であつた。

魏の文帝即ち曹丕はその年號たる貴初の七年間在位したが、その間に斯る輕薄浮華の風が漸く顯著に見られた。史に之を、魏文通達を慕ひて天下守節を賤むと稱するが、それは單に一個人主權者の好尚が然らしめたばかりでなく、後漢以來の名節清議の氣風の中に潜む内在的な弱點が再燃して社會的大勢となつて現はれたものに外ならぬ。されば次代の明帝は在位十三年の間、ひたすら浮

華の士を抑へんとしたが、遂にこの潮流を如何ともすることが出来なかつた。尤も明帝は自身にも個人的弱點を有し、奢侈を好んで頻りに土木工事を起し、人民の困苦を顧みようとはしなかつた。

明帝の後、魏室衰へて實權は司馬氏一門の手に移るが、齊王芳の治世十年、高貴郷公の治世六年、常道郷公の治世五年、合して約二十年の間、所謂浮華の風は滔々として天下を風靡した。この事は同時に清議の頽廢からも來ることであり、所謂名節の士の履行する禮制が全く形骸化して其の實を失つて居り、最早十分に世上の尊敬を贏ち得る資格を有せなくなつてゐたことに起因する。例へば名教を以て自任する何曾の如きは、その私生活に於いて奢侈を極め、帷帳車服は綺麗を窮極し、厨膳の滋味は王者に過ぎ、蒸餅の拆目が十字をなさざれば食はず、一日の食費に萬錢を用ひて、なほ箸を下すの所なしと嘯き在官中屢々侈汰度に過ぐと彈劾を受けてゐる。又孝子の聞え高かりし和嶠の如きも、一方には父の喪に居りて禮法を以て自ら持し、米を量りて食ふといふ謹慎さを示

すが、又一方には、その家産豊富にして王者に擬し、而も性至吝にして錢癖ありと譏られたものである。遂に西晋初に及んで、傅玄をして、天下にまた清議なしの歎を發せしむるに至つた。

二 清 談

此に翻つて魏晋時代に於いて、清議派乃至は禮法之士を以て自任する側より、浮華輕薄と目して排斥さるゝ一派の動靜を觀察して見よう。而してこの一派こそ後世清談派として知らるゝ一群の知名の士なのである。原來清議と清談とは略々同一の意味に用ひられた。後漢末期の清議は、朝廷に於ける濁流の政治に對する、在野清流の抗議であり、就中朝野名節の士の行動に對する評價の討論を中心として行はれ、清議は時に清談とも稱せられたのである。然るに清議の頹廢と共に、清談なる語は之より分離して、從來の清議派を目するに俗流を以てし、この俗流に對して自己一派の談論を清談、或は清言と稱するに至つたのである。この清議より清談の分離は、後漢の滅亡、魏の興起、即ち魏文帝即位の黃初年間を境とし

て實現したと思はれる。

當時在朝の名士に諸葛誕・夏侯玄・鄧颺・李勝等あり、黨を合じ群を連ね、互に相褒歎し、夏侯玄等四人を四聰と名付け、諸葛誕等八人を八達と命じ、劉熙・衛烈・孫密の三人は無資格者なるが何れもその父が大官なるを以て、補缺の意味にて三豫と名付けて仲間に加へ、毀譽を以て罰戮となし、黨譽を以て爵賞となし、己に附する者は之を歎じて言に盈ち、附せざる者は故意に瑕釁を作爲し、専ら交遊を以て業としたとあるが、この時既に清談の風が生じて居つたものと見て差支へない。夏侯玄の持論によると、人才の登用には二階段がある。孝行の詮議の如きは閭巷の下に行はるべきものであり、人材の拔擢の如き大事は台閣の上に行はるべきものである。然るに朝廷大官の進退までも民間の巷議によるは、紛亂の原であると云ふにあり、要するに中正制度の基礎たる清議に對して、清議以上の人物鑑定法が存在することを主張したものである。但し文帝の時代は、夏侯玄等の、所謂清議を超越したる清談の風は未だ端緒を開いただけで、大なる

風潮となるに至らず、次の明帝の初期に於いて、浮華輕薄の士に對する大彈壓があり、夏侯玄等も官を免ぜられて一時逼塞せざるを得なかつた。

明帝の歿後、齊王芳が立ち、正始と改元し、この年號は九年まで続くが、この間王族の曹爽が實權を握り、清談派の名士を重用するに及んで、此に清談の黄金時代の出現を見た。その中心人物は何晏であり、曹爽に用ひられて尙書となり選舉を司り、同臭味の夏侯玄・李勝・鄧颺等を復活させ、更に王弼・丁謐・荀彧等も加はつて、競うて清談をなし、天下の士は争つて之を慕效して、復た制すべからざる風潮を形成した。

何晏・王弼は何れも學者として令名あり、特に何晏は儒學に造詣深き者であるが、共に老莊の學に心酔し、虚無を崇尚して、六經を聖人の糟粕と譬へるに至つた。彼等の所謂清談は老莊の理を論ずる風流談義であり、之に對して儒學的なる名教の清議は之を常談として黜けた。鄧颺が悪夢を見てその回避法を管輅に問ひ、管輅は答へて、願くは非禮を履む勿れと云つた時、鄧颺はこれ老生

の常譚のみと一笑に付してゐるのである。

思ふに正始の頃に至つて急に老莊虚無の學が隆盛を來したについては、その然るべき徑路がある。もともと名節の士の清議なるものゝ根柢は儒教の禮制にある。禮制は中庸の道を具體化したる規範であつて、この規範は寸毫も過ぐすべからざるものである。然るに後漢以來名節の士は、寧ろこの禮制を過すことを以て名譽とするに至つた。特に父母の喪に於いて哀毀過禮といふことが、他人の賞讃を博する所以であつた。實は禮制は之を過して了つては意味がなくなるのであつて、禮を過すことは結局禮を無視することになるのである。既に禮制を無視するならば、これ即ち老莊虚無の教と異なる所がないので、老莊の虚無とは取りもなをさず、實踐的に禮制の排斥を意味するものなのである。斯る論理の發展は次の竹林七賢時代の名士の行動に於いて最も端的に看取される所である。

正始九年の翌嘉平元年、蟄居中の司馬懿が立つてクーデターを行ひ、曹爽一味の黨派は一網打盡に戮死せられ、

何晏鄧颺丁謐李勝等は何れも難に殉じた。司馬懿は間もなく病死したが、これ以後魏室の實權はその子司馬師・司馬昭の掌握する所となつた。清談派は司馬氏のクーデターによつて中心人物を失ひ、朝廷に於ける勢力は崩壊したが、その餘黨は寧ろ野に在り乍ら一世を風靡する指導力を有してゐた。司馬昭の執政時代は所謂竹林七賢を領袖とする清談の白銀時代とも云ふべきものであつた。

七賢の中心人物は阮籍と嵇康とである。彼等の清談は既に論理の域を脱して、虚無の教を實行しつゝあつた。虚無の實踐とは即ち禮制の排斥である。阮籍は母の訃報に接したる時、正に圍碁に熱中しつゝあり、對客が中止せんと提議したるも聽かずして勝負を遂行し、終りて酒を飲むこと二斗、號泣して血を吐くこと數升、葬に先立つて一蒸臍を食ひ、二斗の酒を飲み、また號泣して血數升を吐いた。弔客が來りても酔ひつゞれて散髮箕踞し、哭禮を行はなかつた。併し乍ら性至孝にして追憶の情深く、毀瘠して骨現はるゝ状態であり、殆ど性を滅するに

至つた。蓋し阮籍の考によれば、禮制は人性の至情の發露を妨ぐるものであり、寧ろ禮制を無視して、情に従つて行動するのが人間本來の行き方であると云ふにあるらしい。同じ七賢の一人に數へられる王戎は阮籍よりも二十歳の年少であるが、この人の母の喪に對する態度は、同じく禮制に拘らぬと云つても、何やら阮籍のそれを模倣したるものゝ如く、作爲の跡が見られるやうな氣がせぬでもない。とまれ阮籍は禮制を窺屈なる束縛と考へ、

自然の人情に基づいて行動するを目的としたので、その嫉む所は禮俗の土である。彼は青白眼の使ひ分けをなし、禮俗の土を見る時には白眼を以て對したのには有名な佚事であるが、此に於いて從來の清談は禮俗、俗流として清談派より排斥さるゝに至つたのである。名教派の裴楷は阮籍と自己とを比較して、阮籍は既に方外の士なるが故に禮典を崇ばぬが、我は俗中の士なるが故に軌儀を以て自ら居ると云ひ、阮籍が任官を勧められた時も、流俗に堪えざるを理由として拒絶してゐるのである。阮籍は嘗て王戎を目して俗物と云つたとあり、阮籍の族子阮

俗は俗人を見るを喜まずとあるが、俗なる文字は元來左程悪い意味ではなく、之に低級鄙俗なる意が加はつたのは、恐らく清談者流から始まつたことであらう。

笛康の論に、名教を越へて自ら自然に任ずと云ふ句があるが、之は尤もよく清談派の境地を言ひ表はしてゐる。後漢以來の名節の士は禮制を過ごしたが、そは禮制を認め乍らそれを超過したのである。結局それは禮制を無視したことになつたが、彼等の氣持では禮制を尊重すればこそ過して見たくなつたのであつた。然るに清談派は禮制、即ち名教を超過するのではなくて超越するのである。始めから全々名教なるものを度外視して、如何なる意味に於いても之に拘束されまいとするのである。然し乍ら名教は過去數百年に互つて人心を支配し、社會に秩序を與へて來た權威である。この權威を無視して、人情の自然に基いた行動に出でんとすれば、所謂名教の士、即ち清談派より痛烈なる非難を招く可きは當然である。此に於いて自己の辯護と世人に對する啓蒙の議論が必要になつて來る。彼等の清談には一面に於いて斯る社會的

責務が負はされてゐたのであつた。

笛康に聲無哀樂論の一篇がある。その趣旨とする所は、音聲そのものには哀樂がなく、只人間は習慣によつて哭を聞けば悲しく、歌を聞けば楽しいので、もし斯る習慣がなかつたならばその反對に聞えるかも知れない。然し乍ら情に哀樂のあるのは自然の現象である。自然の哀樂に、人爲的な音聲を配置して兩者の關係が必然的に固定してゐるやうに考へるのは誤である云々といふにある。この議論は實は儒教の禮制を音聲に喩へて論を立てたものであり、吉凶各個の場合に於ける禮制は單なる一個の形式にすぎず、哀樂の情と必然的に結合したものでなく、偶然に古人の手によつて取上げられたに過ぎない。それを萬代不易の自然法の如く考へて執着し、この無意味な禮制に従ふことを以て人生の最大目的とするのは愚かなる仕業であると云つて、清談派の禮俗の士を嘲笑したものである。

儒教の禮制は、形そのものの中に眞理が含まれてゐるといふよりも、寧ろ形そのものが絶對の眞理であることを

主張する。而して支那人の論理に於いては物と事との區別がない。事に絶對的な價値を認めることは、物にも絶對的な價値を認めることである。之に反して清談派の虚無の學説は禮制なる、事の價値を否定するが故に、勢ひ物の存在の價値をも否定することになる。此に於いて禮法派の側より虚無派に對する反撃が開始される。晋初の裴頠の崇有論はその代表的なものである。

崇有論の主旨は、有は最初から有であつて、無から有を生ずることはない、無とは有を取り去つた後の空虚に過ぎぬ、世の中は凡て有で充滿して居り、世に益あるものは凡て有であつて虚無は何の役にも立たぬ、と云ふにある。この論は現象世界を以て、凡て夫々の價値ある有の集合とし、その上に立つて秩序の維持に當つてゐる禮制に絶對の權威を認め、禮制を度外視して曠達を誇る清談派に對して一矢を酬いたものと云ふべきであらう。

崇有と虚無との討論は纏て鬼神有無の論にまで發展する。かの阮脩が無鬼の説を唱へ、嘗て鬼を見たる人ありとの抗議に對し、若し人が死して鬼となるならば、鬼の

着たる衣服もまた死して鬼となりしかと反問して對者を閉口させた話がある。さうかと思へば阮咸の子阮瞻は無鬼を唱へ、嘗て一客と對してその有鬼論をやり込めたが、客は急に我こそは鬼なれと言ひ終ると異形の怪物に變化して消滅し、間もなく阮瞻も病死したなどの逸話もまことしやかに傳へられてゐる。

三 放 達

竹林七賢等の禮法を度外視したる放達の振舞は、最初に之を實踐するには餘程の勇氣が要つたことであると思はれ、事實又少なからず世上に物議を醸したものであつたが、纏て追隨者が輩出するに及び、それが次第に常識化され、また或る程度に骨抜きにもされ、世間も別に之を深く怪しまなくなつた。嘗ては清議派より浮華として痛烈に攻撃されたる清談の風は再び新なる勢を以て盛り返し、朝野を風靡して滔々たる大勢となつた。

竹林七賢の一人なる山濤は魏末より晋初にかけて、吏部郎或は吏部尙書として選舉に携はり、その推轡によつて一度抑へられたる清談派が次第に官界に進出した。山

藩は晋の武帝の太康四年に歿してゐるが、同じく七賢の一に數へらるゝ王戎は更に惠帝の時代まで存命し、清談の指導者となり、晩年その地位を王衍に譲り渡した。

王衍は惠帝在位の十六年間、清談派の領袖としてその名望は先輩の王戎を凌いだ。而して此頃に至つて清談なるものは、儒教の禮制に反撥するの氣力を漸くにして失ひ、單なる談論の爲の談論として、受用せられた。支那社會に深き根柢を据ゑたる儒教の禮制は、老莊虛無の論を眞向より躡して打倒に向つても、家族制度其物が安全なる限り、容易にたぢろく代物ではない。虚無か崇有かの議論が一わたり濟めば社會の風潮は癒て落付くべき所に落付く。儒教實踐の根本たる孝行に對する尊崇は支那に於いて殆ど第二の天性となつてゐる。曹丕が魏王太子たりし時、嘗て衆賓を集めて問題を提出した。曰く、「君父共に篤疾に罹り、良藥一丸あり、以て一人を救ふ可きに、君に用ひんか、父に用ひんか」。坐客の議論紛々たる中に獨り酈原は口を開かうとしない。太子は特に酈原を指名して意見を問ひしに、原は勃然として只一

語、「父なり」と。太子も亦之を難じなかつた。孝行は然くタブー的存在である。

孝行の最終最大の義務は喪禮である。喪禮の規定は甚だ嚴格なる一方、若し之を回避せんとする者があれば、それは不孝者の上に臆病者としての非難を被る危険がある。されば虚無を宗として禮制を排斥する清談者流も、事、親の喪に關すると著しく妥協的態度を示さざるを得ない。勇敢にその所信を斷行したのは、後にも先にも竹林七賢の中、阮籍・阮咸・王戎の三人あるのみ。而も彼等は表面的なる禮制は遵守せざるも、毀瘠骨立とか容貌毀悴とか稱せられて、内心の至孝なるを證明されねばならなかつた。七賢中の山濤の如きは、尤も妥協的態度を示し、その母の喪に遇ひたる時は、齡已に耳順を踰へてゐるが、喪に居る禮を過ぎ、土を負ひて墳を成し、手づから松栢を植ゑるといふ孝行振りを示してゐる。尤も山濤が母を喪ひたるは西晋武帝の初年で、同鼻の賈康が、言論放蕩・非毀典謨の故を以て武帝の父司馬昭に誅戮されて後聞もない時であつたから、明哲保身の彼はいち早

く轉向したのかも知れない。この後は清談派も、喪服の禮制に關する限りは極端なる行動に出づるを慎み、單に日常の行動に關して酣燕曠達に耽るのみで、その清談は單なる理論を弄ぶに止まつた。而して所謂清談派もその私生活に於いて放縱なることは敢て清談派に譲らなかつたので、此に再び清談派と清談派とが歩みよつて融合に向ふ形勢が起つた。清談派も單なる談論としては時に清談派の仲間入りを辭さない。清談はその濼刺たる清新さを失ひ、社會に反撥するよりも社會より遊離しはじめ、清談を中心としたる特權階級の社交界が形成された。而してこの社交界の花形が即ち王衍であつたのである。當時王衍を中心として四友八伯の目があり、王衍は四友の筆頭に數へられてゐる。

當時世の中は魏より晋へと主權が移つても、上流貴族社會には大なる變動なく、知名の政客は曹操に附隨して興起したる豪傑の子孫が大部分を占めてゐた。それも既に初代より孫曾孫の代に至つて漸く閥閥を誇り、貴族の特權を負うて他の一般より自己を區別したくなる。斯る

排他的なる貴族の封鎖社會に於ける交際の要具として清談が利用された。この種の遊戯化された清談は、從來の老莊虛無の論を踏襲するが、それは便宜的のものであり、眞理の所在は何處にあつても構はない、只談論そのことを面白くやつて退ければ目的が達せられるのである。

斯の如き談論の雄たるには必ずしも博學を必要としない。諸葛宏は年少にして未だ莊老の書を讀まざるに、王衍と談じて天才卓出と賞揚されて居り、庾凱は莊子を讀まんとして開卷一尺許りにして止め、全く余と同意見であることが分つたから最早これ以上讀む必要はないと言つた。

清談と同じやうに酒も交際の要具であつた。王衍一派の酒の飲み方は、竹林七賢の情を遣る爲に飲んで讀む酒ではなくして、酒量を競ふ無茶酒であつたらしい。酒豪の第一人者は胡母輔之である。樂安太守となつて任に赴き、氣に入りの向逸等と晝夜酣飲して郡事を視なかつた。光逸は縣の小吏であつたが胡母輔之に見出されて酒

の相手を勤めてから社交界に名を知られた。西晋滅亡の大亂に際して向逸は難を避けて江を渡り、胡母輔之の許に身を投じたが、丁度胡母輔之は仲間を會同して散髮裸身、空を閉ちて酣飲の最中であり、門番は向逸を通して呉れぬ。向逸は一計を案じて脱衣露頭、狗竇イヌケツより中を窺つて大呼すると胡母輔之は、こんな奴は向逸の外にないと云つて呼び入れて再び酒宴を續け、晝夜の別がなかつた。この胡母輔之は奇癖があり、何でも酒呑みがあると引入れては仲間にした。王尼はもと軍人であるが、胡母輔之は見出して軍籍から脱せしめようと其筋に運動したが聽かれない。そこで胡母輔之は酒を持參して王尼の勤務する既の中で大いに痛飲したといふ。畢卓も亦酒量を以て胡母輔之の知遇を得た一人であり、胡母輔之の友人羊曼謝鯤等も亦酒量があつた。胡母輔之の子胡母謙之は才學は父に及ばざるも傲縦は之に過ぎて、亦酒呑みであつた。父が酒を飲んでると謙之が歸つて來て、父の字を呼び、「やア彦國、年が寄つたらばそんなに呑むものではないぞ、俺にも少し呑ませろ」と云ふと父は大喜び

で呼び入れて一緒に酣飲するといふ風であつた。

社交界に於いて持て喋されるには風彩も亦一の必要條件である。魏晋間の名士の傳記にはその風貌が屢々記述されてゐる。清談初期の總帥たる何晏は粉白手を去らず、行歩に影を顧みるといふ洒落者であり、西晋末期の清談界の重鎮王衍は神情明秀風姿詳雅、或は盛才美貌明悟如神と稱せられ、老莊を談するに常に玉柄の麈尾を取り、その手の色澤は玉と同じであつたと云ふ。當時の如き貴族的社交界に於いては、容貌だけでも倣に一家を成すに足りる。衛瑾の孫なる衛玠の如きはその一例である。總角にして羊車に乗じて市に入るに恰も玉人の如く、觀る者、都を傾けて出たと云ひ、彼の親戚の王濟は風姿英爽と稱せられ晋武帝の塔となつた人であるが、衛玠を見る毎に、「珠玉側にあれば我が形の穢なるを覺ゆ」と歎じ、彼の妻父樂廣も之を賞して、「罔として明珠の側にあるが如く朗然として人を照す」と言つたと云ふ。好く玄理を言つたと稱するが何程の才能があつたか、兎に角二十七才で病歿して天下に名を成したのは寧

るその美貌の賜であつたであらう。彼の歿するや世人は、衛玠は人の爲に看殺されたのだと語り合つたと云ふ。

四 門 閥

清談はその清議より分離する當初からして階級的な色彩を有してゐた。即ち名節を標榜する清議派の行動は下層士人の行動にして、清談派は之を超越して上流門閥貴族の特權を主張するかの如き態度を示した。清談派は世事を全々度外に置くかと云へばさにあらず、常に選舉の要路者と密接なる連繫を保つてゐる。先に何晏は吏部尙書であり、次いで現はれたる隱遁生活者の集團の如く見らるゝ竹林七賢も仔細に觀察すれば、その一人山濤は典選十餘年と稱せられ、王戎は官吏進退の最高責任者たる司徒の位に上つてゐるではないか。畢竟彼等の行動は、清議派より見れば、總括して浮華奔競と非難さるゝに十分なる理由があつた。されば王衍と同時に寒門出身の清議派代表者たる閻續の如きは、清談派に對して、その貴族的高踏的なる踞傲さに忌憚なく攻撃を加へてゐるのである。

清談派の名士の身許を洗へば、多くは父祖に開國の元勳を有する執梃子弟である。而して之に對立する清議派の名士も多くは本質的に異らぬ膏粱華胄の出であつた。

當時の交際は次第に奢侈に赴き、或は贈答に、或は招待に、或は賭博に、競うて奢侈を示して他に勝らんと努めた。何曾は食費一日萬錢、その子何邵は一日二萬錢、任愷は一食萬錢となつて停止する所を知らない。彼等は貴族社會に共通の心理たる負け嫌ひの念が強く、且つ自尊心が高かつた。更に怪しむ可きは、禮制を度外視して放達を旨とするに拘らず、下僚に對しては禮を責むるに酷なるものゝあつた事である。王衍の弟王澄は、酈蕪縱誕を以て有名であつたが、荊州刺史となり酒の上で士人宗憲なるものが王澄の意に忤つたといふので之に棒を食はせんとし、僅に別駕郭舒の諫言によつて思ひ止まつたが、その代りに郭舒は鼻を指まれたり眉頭に灸を据ゑられたりして酷い目にあつてゐる。また豪奢を以て聞えたる石崇の酒宴の席で、孫季舒なる者が慢傲過度であつた故を以て、石崇は之を免官せんと決意したるとき、裴楷

に、「足下は人に狂藥を飲ませておき乍ら、人に正禮を責むるのは矛盾ではないか」と諷められて中止したといふ。

斯の如き自尊心の高く、排他的なる特權階級を背景としたる清談的社交界が、王戎・王衍等の指導者を戴いて政治界の上層部を獨占したる結果は知るべきのみである。匈奴の後裔なる劉淵の蹶起に際して爲すべき手段を知らず、洛陽を陥られ北支を蹂躪されて西晋は滅んだ。

史家は西晋滅亡の原因を多く王衍等の清談に歸せんとするが、又別に王衍が妄りに流品を分別したるの致す所とし、清談の背景をなしたる貴族主義其者を罪せんとする議論があることは注意されねばならない。晋の一族司馬容（元帝）は建康に逃れて東晋を興し、僅に江南半壁の天下を保つたが、この東晋は畢竟するに、西晋の繼續でしかなかつた。東晋開創の元勳たる王導の如きも矢張り清談社交界の一方の雄である。東晋に入つて謝氏が大いに顯はれ、王謝二氏が貴族勢力を代表したが、同時に清談的社交界をも代表した。清談の象徴物たる麈尾の如きは、

麈尾王謝家の物と稱せられて、下層士人の手にすべからざる神秘的存在と化した。

漢代よりその傾向が表はれたる貴族の特權階級の勢力擴張は東西晋の交に於いて、大體行く可き所まで行きついたと思はれる。而して清談の流行は斯る貴族社會の發達を背景として起りたるものであつた。余は清談の名士は概ね貴族子弟なるを指摘したが、胡母輔之の仲間には前述の如く二三人の例外がある。抑も東晋初期に八伯八達の目あり、八伯とは阮放・郗鑒・胡母輔之・卞壺・蔡謨・阮孚・劉綏・羊曼を云ひ、八達とは郗放・羊曼・阮孚・謝鯤・畢卓・桓彝・胡母輔之・向逸を指す。此等は何れも貴族出身であるが、只畢卓向逸二人を例外とし、特に向逸は氏素性の知れざる寒門の出である。彼が斯る名士の間に名を列ねたるは、寧ろその幫間的性質が重視された爲であらう。單に酒呑みだといふ丈で正史の列傳に名を載せられた者は流石にこの際に於ける二三の幫間者を以て空前絶後とする。而して幫間の出現其事が、一面に貴族の特權階級の確固不拔の勢力扶植を物語るものに外ならな

い。

現實の問題より遊離して、單なる論理の遊戯と化した清談は、談論そのものの中に存在の理由を求められねばならなかつた。此に王衍の後輩歐陽建の言盡意論が出づ可き理由があつた。之は要するに言語そのものの中に眞理があるのであつて、言より離れて存する眞理を言が云ひ表はすのではないと云ふにあるらしい。談論の粹なる清談は、談議そのものが眞理の追求であつて、勝者の論が其儘に眞理なのである。下つて東晋の中期、許詢は王脩と理を談じて之を屈服せしめ、次に立場を換へて、先の王脩の主張を取りて自らの主張として又王脩を屈服

ツクユディデスの古代史に就いて

一

ツクユディデスの「歴史」八卷は、いふまでもなく、ペロポネソス戦役の歴史を書いたものである。

ツクユディデスの古代史に就いて

せしめた。支道林が之を評して「眞に理の當るを求めるとでなく單なるこぢつけに過ぎぬ」と非難したが、論理そのものゝ討議はこの邊まで來ると、勢ひ佛教の議論を參酌せねばならなくなる。否、清談の發展はその當初より佛教思想の影響を蒙つてゐると見られる節があるのであるが、今は論の多岐に亘るを處れて暫く説き及ばぬこととする。

〔参考文献〕

市村瓊次郎博士。

青木正見博士。

板野長八學士。

清談源流考(支那史研究)

清談(山岩波講座東洋思潮)

清談の一解釋(史學雜誌第五十編第三號)

原 隨 園

ところでその第一卷の一章から二十三章までは、ペロポネソス戦役にいたるまでのギリシア古代史が取扱はれてゐる。その部分は通常 Archaeologia(古代史)と呼ば